



長岡公務員・情報ビジネス専門学校。すぐ隣には姉妹校である長岡こども医療・介護専門学校がある。両校ともに各種実習室が豊富。界隈は両校を行き交う学生で賑やかだ

## 専門性と社会性を身に付けた学生を育て、地元へ送り出す

### 長岡公務員・情報ビジネス専門学校 (新潟県長岡市)

昭和56年創立の長岡公務員・情報ビジネス専門学校は、県内でトップクラスの就職率を誇る。同校では学生が即戦力として活躍できるよう、専門力の習得はもちろん、ビジネスマナーなどの社会人に求められるスキルの習得にも力を入れている。ビジネス系検定を活用する同校の取り組みを紹介する。



清水優作学校長。  
学校長になり4年を迎えるが、就任前から同校の学校運営に携わり、地域のニーズを汲み取った教育を実施している

#### 地域をリードし、活躍する学生を育てたい

長岡公務員・情報ビジネス専門学校は「公務員」「ビジネス」「情報・CG」の分野で10の学科を持つ。約200名いる学生のほとんどが新潟県内の高校出身だ。

「学生は地元での就職を希望して本校に入學してきます。その理由は多くの卒業生が地元で就職し、活躍している実績と創立33年の歴史があるからです。学生たちが希望をかなえられるよう、われわれは地域社会と密接な関係を築き続けています。どのような知識や技術を持った人材が必要とされているかを把握し、産業界のニーズに見合った教育を実現できることが本校の強みです」と話すのは

清水優作学校長だ。

実際に公務員系学科の卒業生は長岡市役所などで、ビジネス系学科の卒業生は営業事務や金融事務としてメーカーや銀行などで、情報・CG系学科の卒業生はソフト会社などでデザイナーやエンジニアとして力を発揮している。管理職となり組織をリードしている人も大勢いるという。

卒業後、活躍できる人材を育てるため、同校ではどのような教育を行っているのだろうか。

「即戦力となる人材を求めている企業

などが多いため、まずは専門知識の習得に重点を置いています。カリキュラムや教材などに工夫を凝らすのはもちろんですが、地元で活躍するプロの方にも力を借りています。例えば直接プロから指導を受けられる時間を設けたり、企業見学会の開催やインターンシップを行ったりしています。また『あの会社を見学したい』『あのプロの話を聞きたい』といった学生の要望も可能な限り実現できるように努力しています。そうすることで学習へのモチベーション維持と、さらなる意欲向上が期待できます。学生がしっかりと学べる環境を整えることが大切です」と清水学校長。「力を入れているのは、専門力だけではない」と続ける。

「学生には社会性も求められています。今の若者たちはコミュニケーション能力が低い、礼儀作法や常識を知らないと言われることがあります。苦しさや辛さを乗り越える力や、辛抱する力が欠けているとも言われます。そうした力を養うために『実践行動学』という科目で困難な問題について学生同士が協力し合い、解決策を導き出すなどの訓練をしています。また企業実習を通して働くことの大変さや、社会では成果が求められることなどについて説き、学生の気付きを促しています」。

専門性と社会性を身に付けた学生を社会に送り出せるよう、多彩な取り組みを行う同校。昨年度の就職率は98%と、その成果は着実に表れている。



情報ビジネス科の本間美香子先生(中央)と  
オフィス系科目を担当する池田鮎美先生(左)、  
徳永翔子先生(右)



就職相談室の村田  
啓助室長。村田氏の  
ノウハウやアドバイ  
スが同校の高い就  
職率を支えている



オフィス事務科1年生の「ビ  
ジネス実務」の授業。隣接する  
長岡こども・医療・介護専門学  
校にある受付実習室を使い、  
受付での立ち居振る舞いや言  
葉遣いを確認する学生たち。  
お辞儀の練習も欠かせない



## 細かい指導が 高い就職率を支える

就職相談室の村田啓助室長は同校の就職活  
動の流れを次のように話す。

「学科によってばらつきはありますが、早い  
学科で1年生の9月から筆記試験対策を開始  
します。筆記試験対策で重要になるのは、  
SPIやCAB・GABといった適性検査をク  
リアすることです。当相談室では毎年、指導に  
最適な解説本を選ぶところから始め、さらに  
解説をかみ砕き詳しくまとめたものを作成し  
ます。やり過ぎではないかと思われるかもし  
れませんが、内定を勝ち取るために、ここまで  
やるのは当然です」。

面接試験対策もきめ細かい指導が行われる。  
「面接試験対策は面接の練習が中心で、1年生  
の1月から個別と集団の面接の練習を始めま  
す。練習終了後、学生は面接官役からアドバイ  
スを得ます。その中で早口になってしまう癖  
があるなど今まで気付かなかったことに気付  
きます。本試験までに面接練習を繰り返して、指  
摘された点などを修正しながら力を付けるこ  
とが狙いです」と村田氏。続けてこう話す。「筆  
記、面接試験対策も重要ですが、やはりビジネ  
スマナーの習得も欠かせません」。

村田氏の言葉を裏付けるように同校ではビ  
ジネスマナーの習得にも力を入れており、オ  
フィス系の科目を数多く展開している。指導

に活用しているのが「ビジネス系検定」だ。学  
科ごとにカリキュラムに最適な検定を取り入  
れているが、5検定の中でも多くの学科が導  
入しているのが「ビジネス実務マナー検定」で  
ある。

公務員分野の「ビジネス公務員科」や、ビジ  
ネス分野の「ビジネスライセンス科」「オフィ  
ス事務科」さらに情報・CG分野の「情報ビジ  
ネス科」のカリキュラムにも「ビジネス実務」  
という科目名で組み込まれている。

同検定の魅力について情報ビジネス科の担  
任を務める本間美香子先生はこう話す。

「私が担任するクラスでは、1年次の11月に  
ビジネス実務マナー検定3級を受験しました。  
同検定をカリキュラムに導入した理由は、ビ  
ジネスマナーを習得できるだけでなく、ビ  
ジネス社会を知ることができるからです。例  
えば、新人歓迎会での振る舞いや通勤時に  
上司を見掛けたときなど、多くの新入社員が  
戸惑うケースへの対応などを学ぶことができ  
ます」。

さらに次のように評価する。

「ビジネス実務マナー検定では感情をコント  
ロールすることの大切さについても学べます。  
どういう言い方をしたら相手の感情が傷つく  
のか、嫌な気持ちになるのかを知ることがで  
きれば、就職面接でどのような態度を取るべ  
きかおのずと分かるはず。就職活動を控えた  
学生にとって大きなメリットとなります」。



ビジネス実務マナー検定3級に合格した、  
情報ビジネス科2年生の池嶋悠さん(右)  
と池原綾乃さん(左)

## ビジネス実務マナー検定は 即戦力となる学生を 育てるために欠かせない

ビジネス系検定などのオフィス系科目を主に担当する先生方に指導法を伺った。今年度、池田鮎美先生はビジネス公務員科で、徳永翔子先生はオフィス事務科で「ビジネス実務」の科目を担当している。

「公務員系の学科は1クラス50人いるため実技の練習はなかなか難しいのですが、お辞儀の練習だけはしっかりやるようにしています。臨機応変に対応できる力も身に付けてほしいので、テキストに載っていない対処法については私の実体験を話したりします。学生に具体的なビジネスシーンをイメージさせることを心掛けています」(池田先生)。

「私が担当するクラスは20名前後と少人数なので、実技指導を中心とした授業を特徴としています。心掛けてているのはオフィスに関係があるグッズは実物を見せるようにしていることです。事務機器は学生が知らない物も多く、『ステープラーはホチキスのこと』と教えると『へえ』という声が上がります。目から入る情報を重視し、印象に残るようにしています」(徳永先生)。

受け持つクラスの人数によって指導方法は異なるものの、ビジネス実務マナー検定について池田先生と徳永先生は「就職活動はもちろん、社会人になってから使える知識や常識、マナーなどを身に付けることができる。社会で即戦力となる学生を育てるために必要な検定」と口をそろえる。

こうした教員の指導のいかにもあり、同校は昨年度、ビジネス実務マナー検定で文部科学大臣賞を受賞した。昨年6月の試験では3学科合計73名が3級に挑戦し70名が合格。11月の試験でも他学科の学生が3級と2級に挑戦した。情報ビジネス科2年生の池嶋悠さんと池原綾乃さんも3級に挑戦し、合格した。

「勉強を始めた頃は、普段使わない『承ります』『いたしかねます』などの言葉に戸惑いましたが、学習を重ねるうちに慣れていきました」と振り返る池嶋さん。池原さんも「これまでビジネスマナーを学ぶ機会がなかったので、知らない知識を習得することの楽しさを感じながら学べました」と笑顔で話す。

2年次に本格的にスタートした就職活動では、学んだことを大いに役立てることができた。

「尊敬語や謙譲語を学んだおかげで、就職面接では正しい言葉遣いで受け答えができるようになったと思います。まだまだ慣れない言い回しがあるので、どんどん使って自然と話せるようになりたいです。卒業までに2級・1

級を目指します」と決意を聞かせてくれた池原さん。池嶋さんも「企業の方と話すときに自然と敬語が出てくるのは検定の学習のおかげです」と喜ぶ。

担任の本間先生は「着実に学びの成果が出ています。二人とも、第一希望の企業から内定をいただくことができました」とうれしそうに語る。

「情報ビジネス科は学内の中でも卒業するまでに挑戦する資格が多く、その数は20〜30個に上ります。もちろんIT知識・簿記などの専門知識の習得がメインですから、ビジネス系検定の取得だけに多くの時間を割くことはできません。なので合格するためには自主的な学習も必要になります。このクラスは皆、真剣に取り組んでくれました」と本間先生は頬を緩める。

同校の学生たちは、短い時間の中で確かな力を付けようと学業に励んでいる。そうした学生の努力を清水学校長はこうたたえる。

「本学の学生は『これほど勉強したことはない』と言うくらい、よく学びます。それは決して勉強がつかいとか大変だというマイナスの意味ではなく、勉強できたことへの感謝の気持ちなのです。学生のやる気を上手に引き出し、確実な力を付けさせるのがわれわれ教職員の仕事。今後も協力してくれる地域社会への感謝を忘れず、地域で活躍し地域をリードする人材を育てていきたいと考えています」。